



* 青葉・夏至 (LA VERDURE & L'ETE)



今年はずっとより木々の緑が濃く、しかもこんもりとしているように見えます。丁度子供が描く木のような形の菩提樹 (le tilleul) に花が咲いて、ほんのりと大気が薫っています。パリのダンフェール・ロシュロー (Denfert-Rochereau) 駅のプラットホーム後方の土手にラベンダー (la lavande) が沢山に咲いて、電車を待つ人達を癒すかの様に芳香を漂わせ、蜂を呼び集めています。朝市を覗きますと、プロヴァンス産の大粒で黒い程に深く紅い桜ん坊 “ビガロー” (la bigarreau) が山と積まれ、仏像が手にする蓮の花の蕾にも似た緑色のアーティチョーク (l' artichaut) も今が旬、茹でるのに大きな鍋が必要で、茹で上がるのに少々時間を要しますが、ヴィネグレットで食べれば、何とも云えない季節の味がします。夏至も間もなく、東の空が明らむ 4時半頃からメルル (le merle) (黒つぐみ) が賑やかに唄い出し、気持ちよく晴れた日は 1日中休む事無く、日が沈んでも暫く明るい西の空に向って、高い所で胸を張り、声高に唄っています。しかし、いつの間にやら黒雲がやって来て、怪しげな風が吹いたりしますと、パイとも鳴かなくなるのです。日本は早くも梅雨期に入った、との便りに、雨に似合う紫陽花 (l' hortensia) の青い花を想いました。こちらの紫陽花は、土が違うからでしょうか、紅い様なピンク色の花で、そのような風情は感じられません。6月21日の“夏至”には、全国各地で音楽祭 (la Fête de la musique) が催され、劇場、各種のホール、広場や街角で、プロばかりか素人も、夜を徹して楽器を奏で、歌い、本格的な夏を賑やかに迎えます。

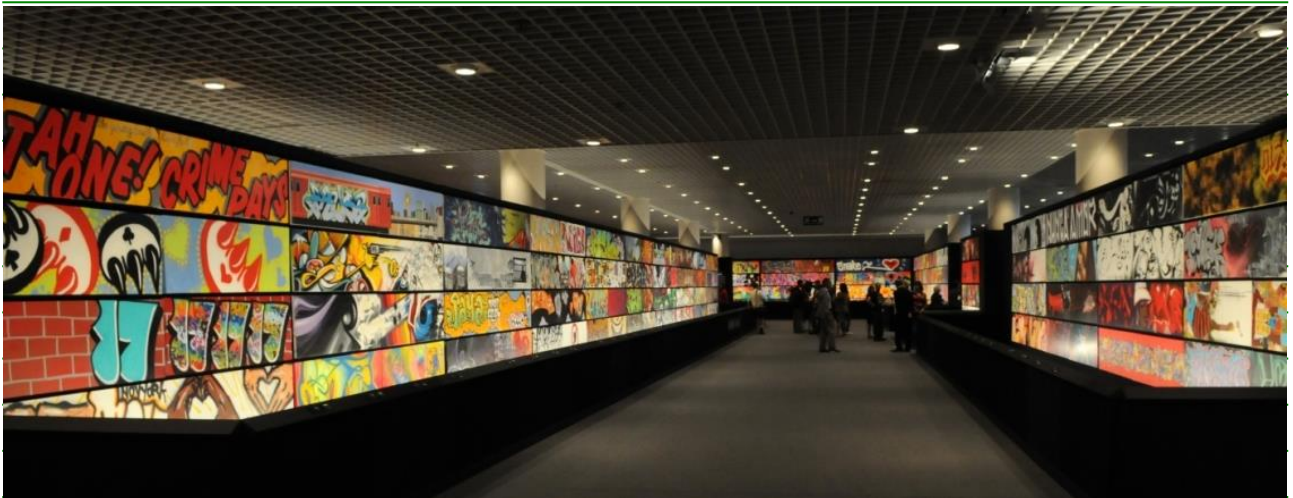
* バカロレア (LE BACCALAUREAT)

6 月に入っての話題はもっぱら“バカロレア”(le baccalauréat)、通称“バック”(le bac)、つまり“大学入学資格試験”です。これは大学や高等専門学校へ入る為の国家試験で、学校単位に行なわれる入試ではなく、理数系、文科系、等、入学を希望する学科によって試験科目・内容も異なり、主に論



文形式で行なわれ、現在受験生は最後の追い込みに懸命です。受験するのは主には高校卒業生ですが、年齢に制限は無く、各人の様々な事情により、今年は最高齢 93 歳（昨年不合格）から最年少 13 歳の約 68 万人が受験の予定です。昨年の合格率は全体で 88% と好成績でしたが、学科によっては教場が溢れて、廊下に座って授業を受ける有様となり、受け入れ態勢の不備が指摘されました。この“バック”に目出度く合格し、希望の学部、学科に登録が済めば、長い夏休み (les vacances d'été) が待っています。明日 17 日が最初の試験、哲学 (la philo) です。

* 「ル・プレッションニスム 1970 - 1990、“キャンパスに描いたグラフィティ”秀作展」 (Expo « LE PRESSIONNISME 1970-1990 , Les chefs-d'oeuvre du graffiti sur toile »)



1970 年初頭ニューヨークに現れたグラフィティは、当初は“壁を汚すイタズラ描き”として訴えられ、犯罪に問われたこともありましたが、そうした苦い経験を経てバイタリティに満ちた現代の芸術活動として“ストリート・アート”と呼ばれ、世界中に広がって、現在では優れた芸術作品として評価されるようになりました。中でもキース・ヘリング (Keith Haring (1958-1990)) とジャン・ミシェル・バスキア (Jean-Michel Basquiat (1960-1988)) が代表的な存在と云えるでしょう。キース・ヘリング、あの乳児のシルエット、角ばった犬の鼻面、怪物など、何かを訴えているポスター、絵、、、。ペンシルバニア生まれの彼は 20 才でニューヨークに上京、社会の悪を告発、世の中の不公平さに反抗するなど、プラカードを掲げて街中を歩き廻っていました。“乳児”は悦びと希望のシンボル、脅威の象徴として犬や天使、奇妙な怪物を描きました。始めは白墨で壁に、それからはシートやテント地にマーカーで描くようになって人目を惹く様になり、やがて画廊の目にも留まるようになりました。独自のポップ・ショップを開店して、Tシャツやポスター等を販売、その売り上げは慈善団体に寄附するなど活躍、ニューヨークの人気者となりましたが、1988 年にエイズに罹

っていることを知り、翌 1989 年に恵まれぬ子供達の為の財団を創設、1990 年に 31 才の若さで惜しまれながら、この世を去りました。ジャン・ミシェル・バスキアは 1960 年ニューヨークの下町に生まれ、ジャズに傾倒し、チャーリー・パーカーに憧れ、画布が買えない時は周囲の壁と云う壁、天井や扉、家具、、、何処までも休むこと無く描き続け、日夜快樂のみを追求、乱れた生活の中でも街のエネルギーを吸収しながら著名な画家達を尊び、謎めいた文や暗号も交え、描いては消し、、、といった毎日だったと云われていますが、結局は麻薬に溺れて 27 才で逝きました。しかし彼の 1981 年作の自画像は 2007 年のサザビーズのオークションで 1450 万ドルもの高値が付いたそうです。この他に文字をベースにした今日“タグ”(le tag)と呼ばれているスタイルを考えたラメルジー(Rammellzee)、今回の展覧会のポスターにもなっているブルーの女性(自画像)でニューヨークの地下鉄にスプレーで描きまくったレディ・ピンク(Lady Pink)等の作品 100 点余りを展示しています。尚、当展覧会の表題にある《le Pressionnisme》という言葉は、印象主義、印象派を表わす《l'Impressionnisme》を意識していると思われるのですが、それでは日本語では何と訳されているのか、何と訳せばよいのでしょうか、、、。



Pinacothèque de Paris (8, rue Vignon, Paris 9^e、メトロ Madeleine 駅下車)にて 9 月 13 日迄開催。毎日 10 時 30-18 時 30 (水、金 20 時 30 迄) 入場料 13 ユーロです

* ポン・デ・ザール (芸術橋) の“愛の鍵” (LES CADENAS D' AMOUR DU PONT DES ARTS)

1804 年にセーヌ河に架けられたルーヴル宮とフランス・アカデミーを繋ぐ歩行者専用の鉄の橋“ポン・デ・ザール”(le pont des Arts)、その欄干(le parapet)のグリルに誰が始めたのか 2008 年頃から恋人達が“愛の証”としてかけた大量のカドナ(南京錠)、今ではパリの名所の一つにも数えられてい



ましたが、その数が余りにも多く、推定で 70 万個、重さは約 45 トンにもなり、昨今の今頃には、鉄格子の一つが重さに耐えかねて崩れ落ちた為、危険と判断したパリ市当局は、この 6 月 1 日から 1 週間をかけて全てを撤去しました。その後欄干にはめられた仮設のボードには、“芸術橋”の名に相応しく 4 人のアーティスト、ブリュスク(Brusk(仏)), エル・セエド(El Se ed(チュニジア)), パントニオ(Pantonio(葡)), ジェイス(Jace(レユニオン))によるグラフィティ風ストリート・アートのカラフルな装飾が為されて、全く雰囲気が変わりました。しかしこの秋には南京錠が付けられないように設計された安全ガラス材のボードにはめかえられるそうです。

2015 年 6 月 16 日 Saint J.F. Régis 日の出 05 時 46 分・日の入 21 時 56 天気：パリ朝夕 12℃・日中 22℃晴天、ニース 20℃/26℃曇天、ストラスブール 15℃/22℃曇天、コタタン半島 9℃/20℃晴天

塚谷裕一著カラー版「スキマの植物の世界」(中公新書)という本を手に入れて、植物の“生きる力”に感動しています。「駅のホームのはじっこ、車道の割れ目、、、何でこんな所に?、、植物は旺盛に成長している、、、」